



美術部が中日新聞で紹介されました。

中日新聞

2023年(令和5年)7月29日(土曜日)

市民版 16

市民版



発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)8811

全国高校文化祭へ6年連続出品の北高美術部

無名から急成長 本気の意識改革

鹿児島県で二十九日から開かれる全国高校総合文化祭(総文)で、北高校(北区)美術部が今年も作品を発表する。平面(絵画)部門で六年連続の出品。今では部の評判を聞いて、同校への入学を決める生徒もいる。実績を挙げてきた背景について、先生や生徒に聞いた。



立ち絵を描く部員たち。いずれも北区の北高で

「何もやってない文化部そのものだった。顧問の林田健教諭(健)からは意外な答えが返ってきた。美術を教える林田教諭が同校に赴任したのは二〇一七年。その頃の美術部は、文化部のインターハイともいわれる総文のことを知らず、「何となく部に来て少し絵を描くような感じだった」という。

「周走って体力づくりにも取り組む。同校の美術部では立ち絵を描くのが基本。足腰が弱いと集中して描き続けることができない。夏休みには三重県志摩市の港町で風景画を描く合宿も実施。筆さばきを向上させるため、書道のトレーニング

金づちを使って自ら木枠にキャンバスを張りつける。林田教諭は「自分で準備したもので、個一個積み上げていく。意外とこういうところが作品につながっていく」と狙いを語る。

キャンバス張り/体力づくり/書道練習/学校外活動



金づちで木枠に張り付け、キャンバス作りにも取り組む

も取り入れている。総文には今年、選考を経て県代表となった二年生三人の絵画作品を出品。黒木真侑さん(も)と稲熊袖紀さん(さ)の二人は部の作品に引かれて入部。黒木さんは「総文に連続で出てまじめにやっていると美術部。細かくて自分にはない作品が多くて成長できると思った」と話す。もう一人の鈴木佑奈さん(な)は美術の本格的な経験はなかったが、「せつなく部活に入るなら強いところ」と門をたたいた。日々の積み重ねでみる上達し、将来は美大への進学も考える。

学校外での活動も特徴の一つ。区役所や北署と連携し、ポスターやのぼり旗のデザインを作成している。稲熊さんは「大学生や年の近い人たちと関わる機会が増え、社会経験やコミュニケーション能力が上がった」と人間的な成長も実感する。

「北高美術館プロジェクト」と題し、校内で、ミレーの落し穂拾いといった著名な絵画作品の模写の展示もしている。林田教諭は部の活動を学校全体に知ってもらい、日常的に美術作品に触れてもらうきっかけにもなれば良い」と期待する。

取材の様子

